

<要 旨>

県史跡「湯舟沢環状列石」と「滝沢市埋蔵文化財センター」において減少傾向にある「子ども」と「成人」の入館者数を回復し、各入館者の「博物館体験」を深める方法を探った。そのために、縄文景観を統一テーマとした7回連続のワークショップを実施し、参加者の反応を調査した。その結果、「親子」を対象とした企画の効果が明らかになった。

1 研究の概要（背景・目的等）

岩手県の指定史跡、滝沢市「湯舟沢環状列石」は約4千年前の縄文時代後期に造られたストーンサークルである。この遺跡は当時の共同墓地および祭祀場と考えられている。列石の中央に立つと、体が自然と真西を向き、彼方に谷地山（標高528m）を望むことができる。春分および秋分の日、縄文人が山頂に沈む夕日を眺めながら、生と死について思いを馳せたと考えられている。つまり、縄文人の「景観」利用がうかがわれる重要な史跡である。

この遺跡は、東北地方から北海道南部にかけて発達する大型環状列石の変遷と縄文時代の社会構造を知る上でも極めて貴重だと言われている。2000年、隣接地に埋蔵文化財センターが開館し、展示室や体験講座で学べるようになった。センターは、入館者が一部の土器や石器に触れられるようなハンズオンの展示をおこない、また、勾玉作りなどの体験講座、著名講師を招いての連続講座、縄文を題材にしたアート展など、数々の企画を精力的に実施してきた。

こうした努力により、年間入館者数は2,500人前後を維持しているが、小学生の入館者数は減少している。また、入館料免除対象に含まれない成人の入館者数も減っている。毎回、講演会に参加する熱心な考古学ファンが100名ほどいるが、高齢者に著しく偏っている。そこで、目標とする入館者の年齢層を絞り込み、小学生および成人のリピーターを増やすことが、求められている。

さらに、入館者一人一人の博物館体験を深めることも大きな課題である。入館者減の原因としては、館側が提供するものと入館者が求めているものとの食い違いも考えられる。いま一度、入館者の真の要請を明らかにし、公立博物館の社会的な存在意義を高める必要がある。

そのために、単発で一過性のイベントではなく、複数回で連続性を持たせたワークショップを企画し、とくに若い世代が博物館や史跡景観に興味と親しみを持てるような、市民参加の仕組みを作って実行する。統一したテーマの元に、多彩な内容で親子のリピーターを養成しながら、博物館体験について詳細なインタビューをおこない、内容を分析する。

連続ワークショップのテーマは「景観」とする。この史跡公園の最大の価値は環状列石とそれを含む周囲の景

観（ランドスケープ）である。しかし、周囲の開発について厳しく規制はされておらず、最近では景観を乱す要素がいくつも現れている。遺跡の敷地内には、縄文人が利用していたと推測される樹種が植えられているが、とくに落葉期は周囲の異物が目に入りやすい。一方、史跡としての公開から時が経ち、育ちすぎた木のなかには谷地山への眺望を阻害しているものがある。そこで、ワークショップでは環状列石を持つ他の縄文遺跡へのツアーを実施し、比較対象とする。これに基づいて、史跡「湯舟沢環状列石」の植生修復と環境整備を試みることも目的の一つである。

2 研究の内容（方法・経過等）

滝沢市埋蔵文化財センターにおいて内容に連続性があるワークショップ「石と森と星の学校」を7回開催した。通して参加する親子入館者の博物館体験について、親子、それぞれに詳細なインタビューを繰り返しおこなって分析した。これにより、個人の体験内容と記憶について詳細に把握することができる。とくに、親子のニーズの違いについて検証した。また埋文センタースタッフへのアンケートもおこなった。「石と森と星の学校」のスケジュールは以下の通りである。

募集：2014年秋 市内の小・中学校にチラシを配付して、この計画に強い興味をもち、継続して参加できる小・中学生と親を募集した。親子13組(38人)が参加した。

第1回：2014年2月1日 ジオラマ作り。環状列石が造られた縄文時代の地形を積層模型で再現した。参加者全員が等高線図に基づきスチレンペーパーを電熱カッターで切り抜き、スプレー糊で貼り付けながら積み重ねた。できあがった積層模型を元に、当時の自然環境や村の位置、人々の生活について学んだ。

第2回：3月21日 春分の日。縄文時代の自然環境とシカ、人間の関係を考えるきっかけとなるネーチャーゲームを二つおこなった。土器・埴輪作りの後、縄文時代の日没と夜空をコンピュータ・シミュレーションによって再現し、天体の動きについて学んだ。その後、外

に出て、ほぼ真西に位置する谷地山に落ちる夕日が見えるように環状列石が設置されたとの仮説を元に、現場で日没の瞬間を全員で目撃した。

第3回：4月26日 縄文バスツアー1。一戸町御所野縄文博物館を訪ね、館内外の見学、火起こし、縄文鍋、ストラップ作りを体験した。

第4回：6月7日 縄文バスツアー2。鹿角市大湯ストーンサークル、青森市三内丸山遺跡を訪ね、館内外を見学した。

第5回：7月5日 植樹と伐採。午前中は縄文人が利用していたと推測される樹種を参加者が史跡敷地内に植樹した。これは景観を乱す外部の要素を史跡内から見えなくようにするための修復作業でもある。午後は山田昌久教授(首都大学東京)の指導の下、石斧による樹木の伐採に全員で挑戦し、達成した。

第6回：8月9日 佐々木由香統括部長(パレオ・ラボ)指導の下、埋蔵文化財センターに保管されている本物の縄文土器断片に残る種子圧痕からシリコンでレプリカを取り、顕微鏡で観察して植物を同定した。実際に、いくつかの発見があった。

第7回：9月20日 最終回。岡村道雄名誉館長(奥松島縄文村歴史資料館)による講話の後、学校の修了式をおこない、参加者に修了証を授与した。

なお、ワークショップの冒頭では毎回、アイスブレイクとしてネーチャーゲーム(プロジェクトワイルド)をおこない、環境教育への導入とした。

3 これまで得られた研究の成果

「石斧での伐採が実際の景観改善に役立つ」「本物の土器断片から種子の痕跡を発見する」など、オリジナルな要素を含んだ作業をしながら、その場で専門家、一線級の研究者の指導が受けられたことから、参加者の満足度は高かった。相手が子どもだからと言って、専門性を安易に下げる必要はない。と同時に、子どもたちの五感に働きかける取り組みが効果的であった。これらの要素に、さらに、その場所でしかできない体験が加われば、館の強みとなることを確認した。

参加者で多かったのは「母・子」の組み合わせであった。1回でも父親の参加があったのは参加親子13組のうち3組で、12組は母親もしくは祖母の参加であった。男性(父親)は自分の興味を高めるために、女性(母親)は子どもの興味を広げるために博物館を利用する傾向が強かった。

4 今後の具体的な展開

幼少期に博物館へ行ったことがある人は長じてからも博物館に行く傾向があった。とくに幼少期、博物館に好印象を抱いた人にその傾向が強かった。したがって博物館は、親子連れの入館者を想定して企画することが重要だろう。子が親となり、今度は自分の子どもを連れて来るような好循環が期待される。また、子どものために、あるいは子に引っ張られて来館した親が、成人としての目で展示や内容の新しい魅力を発見する場合もあることが、アンケートやインタビューから明らかになった。



写真1 景観を阻害していた樹木を石斧で伐採。全員が交代で石斧を振るい、2時間半以上かけて切り倒した。午前中の植樹と合わせ、史跡公園の景観改善に貢献した。



写真2 圧痕分析。本物の発掘土器断片の圧痕にシリコンを注入し、硬化したレプリカを顕微鏡で観察した。子どもたちの集中度が極めて高かった。「発見」直前の様子。

5 その他

「石と森と星の学校」は二度に渡って盛岡タイムスの記事として採り上げられた(2015年1月11日「縄文の暮らし 親子で体験」、8月14日「大昔の植物探しに挑戦」)。また、湯舟沢III遺跡「弥生土器圧痕レプリカ法調査」の報告書「弥生のムラ 湯舟沢」(滝沢市教育委員会、2016年2月発行)にも、圧痕レプリカを扱った回の内容が紹介された。